

浄土

1992-7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授承認雜誌 第三二五号)
平成四年六月二十五日印刷 平成四年七月一日発行
第五十八卷 七月号





七月の秀句

白服や海を見たりし釦はめ

加藤 楸邨

白地着てこの郷愁のどこよりぞ

加藤 楸邨

羅よりひらめく足も遠くなりぬ

加藤 楸邨

七月号



専修念仏をいたす輩(ともがら)、
当世にも往生を遂ぐるきこえ、そ
の数多し。

——『念仏大意』

目 次

にこにこ法話

地球が危ない! (二) 長谷川 岱 潤 (2)

《読者のページ》

お地藏さん 上 野 浩 (10)

(ひ) (と) (く) (ち) (俳) (話) [13] 夏念仏 (18)

季語やぶにらみ (25)

..... 木 下 隆 一 (25)

壬申の乱(2)

◇◇心のしらべ・生活のうた⑦◇◇

“百人一首” (二) 細 田 隆 善 (19)

表紙絵 小林治郎画

地球が危ない！(二)

「ねえねえ、この間の話だけどさ、尊厳なる生存なんて本当にあるのかなあ」

「ミーちゃんはどう思うの」

「是非そうなってくれなくちゃ困るよ。」

「だって私たちの将来なんだから」

「そうだよねえ。科学者たちの予測をそのまま信じれば、あと三十二年で経済はストップし、六十六年で弱肉強食の暗黒

はせがわ
長谷川 岱潤

(東京・品川区戒法寺住職)

時代になり、九十八年後に人類は絶滅してしまふんだって。そうだとしたら、ミーちゃんたちの将来はまさに暗いものだし、ミーちゃんたちの子供たちはもう絶望的な未来しかないってことになってしまふものね」

「そんなんだったら、私、結婚なんてしないわ」

「まあまあ、落ち着いて」

「だって、その科学者が」

「だからさ、問題はむしろ今なんだよ。

今の延長戦上に未来があるんだから、今の私たちの生き方が未来を決めると思うのさ」

「お父さんにはまだ希望がもてるの」

「そうだねえ、ちょっとだけだけね。」

ほらこの前も言つたろ。この科学者たちの予測は今の価値観、今のままの生活を求めることがあと三十二年も続くって予想してるんだよ。そしてまた北の先進国で資源がなくなること気づいても、南の国ではまだそのまま続けるなんて言ってるんだよね。つまり、人間はずっと今の価値観を変えられずに進み続けると思つて、予測を立ててゐるのさ」

「だったらどうするの」

「価値観を変えればいいのさ」

「どういうことなの。もつとわかりやすく言つて」

「人間はずっと、より早く、より便利に、そしてより快適にを目標、にいろいろなものを発明し、進歩してきたんだよね。」

暑い時にはクーラーを、寒い時には暖房を、そして、遠くへ行きたい時には飛行機で、近い時には車でといった具合に。

さまざまな機械を発明し、また使い捨て文化なんて言われるほど、ものを使いこんで今の私たちの快適な生活があるわけだよね。でもその結果地球はどうなったのだろうか」

「どうなったの」

「空気や海が汚れるばかりじゃなく、お天気もおかしくしてしまっているんだよ。酸性雨なんて呼ばれる酸性の強い雨が降ったり、温室効果ガスなんて言って、地球全体がだんだん暖かくなってしまっているんだよ」

「暖かくなるのって良くないの。ミィー

ちゃんは冬より夏のほうが好きだから、あつたかくなるのいいけどな」

「自然は今までどおりの自然が一番いいんだよ。温度が上がってゆくと、南極や北極の氷が解けてしまうでしょう。そうしたら海の水が増えて、海面が上がってしまうじゃない。海辺の人たちがみんな住めなくなってしまうんだよ、それに氣候が変わったら、農作物だって採れなくなっちゃうよ」

「それじゃ大変だわ、やっぱり今までどおりじゃなくちゃ困るよねえ」

「それからねえ、アフリカの方じゃどんな土地が乾燥し、砂漠化していつてしまっているし、そしてとっても怖いのは、地球の上に太陽から来るとしても強い光

を受け止めてくれていたオゾン層っていう空気の膜があるのだけどね。その膜を私たちが日常便利に使っているフロンガスっていうガスが、壊してゐることなんだよ」

「オゾン層がなくなるとそんなに怖い
の」

「怖いよ。今までずっと地球を守ってくれていたものなんだよ。それが守りきれなくなっちゃったら、地球上のすべての生き物に影響がでるでしょう。人間は皮膚ガンとか目の病気になる人が増えるだろうって言っているよ」

「やだー。こういうの、みんな私たちの生活が原因なの」

「そう。私たちが求めてきた早くて、便

利で、快適な生活が原因なんだと思うよ」
「でも、早くて、便利で、快適なことが
良くないなんておかしいわ」

「確かに、早くて、便利で、快適なことを求めること自体が悪いことだとは言いが切れないよ。でもそれが良いことだと、
思い込みすぎてたんじゃないのかな」

「だって、いいことなんでしょ」

「仏様の教えに、物事はみんな相対する
二つの面を持つてゐるって書いてあるんだ」

「なあに、それ」

「つまりね、ここにある一枚の紙にだって表と裏があるでしょう。今の時間、日本は夜だけど、地球の裏側の国は昼間だよ。早いと確かに楽だけれど、その代わ

り景色が見れなかったり、お話する時間がなかったりするでしょ。便利になるということとは、その反面何かを切り捨てているってことだよ。快適な生活はすばらしいけど、そうした生活によって、人間の身体がどんどん弱くなっていくってことも言われているよね。どんなものでも、どんなことでも必ず相対する二つの面を持っているというのが、仏様の教えなんだよ」

「かならず、良い面と、悪い面があるっていうこと」

「そういうふうに言ってもいいし、場合によっては、ただ価値観が違うと言ってもいいかな。たとえばあの苦しみがまったく無いと言われている極楽の世界に

だって、光と陰がちゃんとあるんだよ」

「へえ、陰があるの」

「光だけじゃなく、光と陰という二つの相対するものがあることが、世の中の条件なんだね」

「光だけ求めても、陰がくっついてきちゃうってことなんだね」

「たとえばさっき言ったフロンガスだって、悪者の代表では決まらなかったんだよ。燃えないし、人体への影響は無いし、分解しにくいから安心して使えるということ、冷凍機やエアコン、スプレーなどに便利に使ってきたわけで、フロンガスの使用が今の快適な生活をつくってきたわけだよ。しかもそのフロンガスがオゾン層を破壊するということは、そ

れを使い始めた時から解っていたことだよね。それなのにその便利さ、その結果で得られる快適さばかりに目が行って、悪い面を見ようとしなかった。その結果がフロンガス全廃という運動になったんだ」

「限度を越えちゃったんだね」

「そうだね。でもね、人間は便利さ、快適さの追求をやめるのではなく、フロンガスに変わるものを開発しているんだよね。これじゃいつまでたっても、光と陰のいちごっこだよね」

「どうしても、終わらないのかなあ」

「だから、その追求しているものの自体、早くて、便利で、快適さ、そのものの自体に光と陰があることを解らなくてはいいけ

ないんだよ。地球ができたのは今から四十六億年も前のことだよ。人類が誕生したのは百万年前と言われているよね。そして今のような世の中になり始めたのは、産業革命からだから二百二十年前でしょ。ちよつと想像つかない数字が並んだけど、この間お父さんが計算してみたのは地球ができたのを一か月前としてみたんだ。すると人類が誕生したのは一分三十七秒前、産業革命は一、二秒前のできごとになっちゃったのさ。一か月かかって作ってきたものを、わずか一、二秒で作り替えるなんてできっこないよね」

「人間って、地球から見たら点みたいな存在なんだね」

「その点が自分たちの欲望の追求で、地球全体を壊しているんだね」

「どうしたらいいんだろう」

「さっきも言ったように、早くて、便利で、快適な生活の悪い面を見つめてゆくこと。そしてまず最初は、世界中の人が幸せになることを願うことから始めよう」

「他にできることある」

「ミーちゃんだったら、そうだなあ。紙や鉛筆、それから電気やお水を大事に使うおうね。そういうふうにものを大事にすること、これは仏様の教えでもあるんだよ。どの位できるかなあ」

「私ガンバルわ。だって将来がかかってるんですもの」

竹 中 信 常 著

佛 心 凡 情

ポケット版 二四六ページ
定価五〇〇円 二二一〇円

◎今は亡き竹中信常博士の好評の随想集。再版増刷が刷り上がりました。法話の材料、または施本としてご利用下さい。

《発行・発売》

大 道 社

電話（〇三） 三三六二一五九四四
振替（東京） 一一八二四七

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもつて、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰會

《読者のページ》

お地藏さん

お地藏さん。私共はよく街の角、あるいは道路の片隅などに石の地藏さんを見かける。また人通りも殆んどない、野原の片すみなどに石の地藏さんに逢うこともある。そして寺院の境内、屋内には勿論、その立像が飾られている。このように、わが国においては各地に地藏さんの

上野の

浩

姿を見ることが極めて多いが、これは地藏さんが多くの人々から厚い信仰を集めていることを示している。

それでは私共と極めて親しいお地藏さんとは一体いかなるほとけであろうか。ここにそれを考えてみようと思う。

お地藏さんの起りはインドの国であ

る。梵語名をクシテイ・ガルバといい、わが国においては地藏菩薩、あるいは地藏尊と呼び、密教ではこれを悲願金剛、悲愍金剛、および興願金剛の三通りのいい方がある。

この菩薩は広く顕教でも、また密教でも説かれていて、その信仰もインド、中国、およびわが国を通して、発展してきたのである。特にわが国においては、人々のこのほとけに対する信仰は極めて厚く、かつ広きにわたってかつ親しみをもって迎えられている。そして仏教のほとけの中で、最も庶民的なものといえ、この地藏菩薩をあげなければなるまい。

ところでこのほとけに対する信仰は古く、奈良朝以前からで、天空を表徴した虚空蔵菩薩に對して、大地を表徴した地藏菩薩はその靈驗譚も数多く伝えられている。

地藏菩薩は私共と同じくこの現実世界に實在しているほとけと考えられている。その姿を見ると常に頭を剃り、黒染の衣を着し、右手に錫杖を持ち、左手に宝珠を捧げた僧形をしている。菩薩でありながら僧形をしているほとけは地藏菩薩だけである。

菩薩というのは多くは私共衆生のため、自らの誓願を立て、修行してこれを

成就し、もつて衆生を救つてくれるものであるが、地藏菩薩も「大悲代受苦」という誓願を立てており、あまねく六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六種の境界で、私共が善惡の業因によつて必ずしもむくとされるところ）にうめくわれわれ衆生の罪や苦しみを背負つてくれるのである。また釈尊が入滅し、釈尊に代つて弥勒菩薩が如来（仏陀）としてこの世に降下してくるのが今から五十六億七千万年も先のことであるので、この間において私共を地獄からすくつてくれるほとけとして存在する。

ところで地藏菩薩はまた、特に信心と

いうことを知らない子供のために、その死後の運命を護つてくれるほとけとしても崇敬されており、その救いは大地の恵みのように、なにびとに対してもひとしく与えられる。さらに延命地藏經によると、女人の安産とか、寿命長延とか、あるいは穀物成熟など、七種の福德があるとされている。そしてこの菩薩に子安地藏の名がつけられているところもある。このほか、靈驗にまつわる地名、あるいは人名のつけられた地藏も各地に散在し、わが国の人々の地藏崇拜の深さを知ることができる。

さて、地藏菩薩も観音菩薩のように分

身をする。普通、六仏身に分れるのであるが、これを人々は六地藏といっている。

いまこれらの地藏の名称をあげてみると、説によっていろいろのいい方があるが、ここでは普通使われるものをとってみよう。すなわち、護讃（または地持）、辨尼（または陀羅尼）、破勝（または宝性）、延命（または鷄龜）、不休息（または法性）、讃龍（または法印）、の各地蔵である。

この六地藏は六道に迷う衆生を救うため、その身を六つに変身させたものである。その六身の姿をみると、あるものは香爐をもち、あるものは合掌し、あるものは宝珠をもち、あるものは錫杖をもち、

あるものは華篋をもち、そしてあるものは念珠をもっている。

ところで、わが国においては、地藏菩薩に関して民間信仰での行事がいろいろと伝えられている。その一、二のものをあげてみると、地藏盆と賽の河原の伝承が有名である。これらについて述べてみよう。

地藏盆

地藏盆は、文献によると地藏祭り、あるいは地藏会ともいわれ、現在では多くの地で行なわれている。しかし、もとは平安朝時代に京都に起った地藏講に由来

して、旧暦の七月二十四日に行なわれたものである。地藏盆の名は地藏信仰が盂蘭盆の行事と結びついたことを示すが、その理由には正確にはわからない。おそらく六道の衆生を教化するという地藏菩薩に、六道に流転する祖先を祀る盂蘭盆の行事への参加を求めたことによるものであろう。

京都における地藏盆は、現在は八月二十三日、二十四日に行なわれ、町内ごとに石地藏の前に屋台などを組み、燈明、提灯をともし、香華、餅のほか芋、南瓜、葉ほうずきなど時節の産物などを供え、子どもたちは浴衣姿で念仏や余興に

興じるのが常である。また二十四日には六所地藏詣といって、加茂、御泥池、山科、伏見、鳥羽、桂、および太秦の六地藏を巡拝する風習がある。

賽の河原

賽の河原とは、小児が死んだのち赴くところと信ぜられている地獄のことをいう。しかしこのことは世の俗信であって、仏教經典には全く典拠がない。しかしこの信仰は世の人々の胸に深く刻みこまれているので、ここに常盤大定博士の説明によって、賽の河原の概略を記してみようと思う。

賽の河原は一説によると、山城国葛野郡下佐比里の桂河原のことだといわれる。ここは平安京の市民のために設けられた葬地であつて、市の人々は屍体を河畔に埋葬し、河原の石を積み重ねて塔婆の代りとし、死者の菩提を弔つたという。

また、他の一説によると、小児の死んで赴くところと信じられてゐる地獄をいい、前に述べた山城の賽の河原と六道輪廻の思想、および六道能化の菩薩である地藏菩薩と、さらに法華經の聚沙立塔の經説などを互いに混合し、融合して、いわゆる賽の河原の俗信を生じたものと思われる。聚沙立塔のことは方便品にて

ているが、これはあるいは大和添上郡の狹井川をさしていったものともいわれ、あるいはまた賽の河原は賽の神、すなわち道祖神と関係があるともいう。いまこの信仰は一つの物語り風にまとまつてゐるのでこれを記してみよう。

およそ人間は母の胎内に十ヶ月もいて、そして生れてくる。その胎内にあゝる間に、胎児は母に数えられないほどの苦を与える。それなのに幼くして死んでしまふ子供は母のあつち思ひに對して報ゆることすらできないでゐる。その業のむくいとしてその子は賽の河原で石を拾つて塔を積みせられる。この児が塔を

積みおわると、忽ち悪風ができてこれを吹き散らし、そのとき火焰がおこつて石も河原もみな焼きつくされてしまう。童子らはその苦に堪えられず、泣きさけび、逃れようとするが、どうしても逃れることができない。やがて焰に焼かれて童子らは白骨となってしまう。このとき、地藏菩薩が現われて、「現在未来しゆはつをこんそふくによらいちこんふてうたさい諸悪道」と唱えと、童子らは再びもとの姿となる。これを悲しむ母の涙は血の池となるといわれている。これは貞慶の作と伝えられるが、しかし信じがたい。私はかなり昔になるがある寺院で「賽

の河原の劇」をみたことがある。そのときは風の代りに二人の鬼を使っていたのをおぼえている。

これを基とした説教節の河原もある。その一節をあげてみよう。「一つや二つ三つや四つ、十より内の幼児おきなごが、母の乳房をはなれては、賽の河原に集りて、晝の三時の間には、大石はこび塚につく、夜の三時の間には、岩を拾いて塔をつむ、一重積んでは父のため、二重積んでは母のため、三重積んでは西を向き、しきみほどなる手を合わせ、郷里兄弟わがためと、なくなく石を運ぶなり……」という名文句の唄である。

好評

法然上人

浄土三部経講説

B 6判五四二頁
価四、五〇〇円

法然上人撰述の無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の原典を訓読註解して和訳し、更に和字三経の原典を註解和訳したものを加え、本宗所依の経典に対する宗祖の明解な義解を記す

浄土宗勤行の解説

B 6判三六六頁
価三、六〇〇円

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B 6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B 6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B 6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳 浄土三部経

B 6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人選撰集

B 6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師観經四帖疏

B 6判五八四頁
価四、五〇〇円

和訳 善導大師六時礼讃

B 6判二六五頁
価二、四〇〇円

○本書でお申込下さい。代金（送料実費）は後払（振替用紙同封）

編訳 村瀬 秀雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

發行所 常念寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番

夏念仏

勝 崎 裕 彦

なつねんぶつ

夏念仏とは、夏ねぶつともいい、寒行・寒

念仏に対していわれるものである。夏の間の折をみて営まれる念仏行で、もとより特定の行事ではない。麦作を営む地方では、麦の収穫期に合わせて、その初穂を供養したりして、かつては念仏の法要を勤めたりしたという。取り入れの喜びを念仏に託して、農山村に鉦の音が鳴り渡ったことであろう。

手廻しに朝の間涼し夏念仏（野坡）

蒸い暑い夏的一天、真夏日の続く折柄など、不快指数も天井知らずである。ストレスが次

のストレスを呼び、心身のありようも決してよくはない。こうした時に臨み、折に触れての念仏行。夏念仏という語呂合いをかみしめて、「南無阿弥陀仏」と唱和する。「紙合羽かろしやうき世夏念仏」と作句したのは宝井其角であるが、江戸時代の宗匠たちの念仏の声も耳元に聞こえるかのようなのである。

夏念仏には、寒念仏とは異なった、くつろいだゆるやかな雰囲気がある。寒中のきびしい修行然とした寒念仏に対して、暑さの中に静かに身を置いて、心の避暑とでもいうべき涼しさを味わうものではなからうか。また、一声一声の念仏が身体の休らぎを促して行くものであろう。

夕澄みて夏念仏の一会かな（裕彦）

心のしらべ・生活のうた(七)

世界に秀でた「愛」の詩集^{ボエム}

“百人一首”〔二〕

細 田 隆 善（俳号豊明）

①秋の田のかりほの庵の^{いは}苫を^{とま}荒^{あら}み

わが^{ころも}衣手は^{つゆ}露にぬれつつ

天智天皇^{てんじ}

百人一首のトップの歌は第三十八代天

智天皇の歌である。これは百人一首の選者である当代第一の歌人藤原定家^{ていか}の思考によるものであるが、この百人の歌人を若干時代を考慮して定家までの一流歌人

の歌を網羅したものである。しかもだれもが親しみやすい愛の歌を選び、かつ万葉集を尊重し、万葉集がトップに第二十一代雄略天皇の長歌を掲げていることに思いをよせ、天智天皇の歌を最初に掲げたものである。

この歌の「かりほの庵」は仮小屋、番小屋、粗末な家のことであり、「苫」は雨風をしのごために小舟や小屋に茅などの覆いをするものである。秋の取り入れの忙しい頃、粗末な小屋の覆いがあらいで袖が夜露にぬれて寒いことであろうという農民を哀れんでの歌でもあるが、天皇自身のことでもある。この歌の重要な部分は袖が夜露にぬれて寒いということである。

天皇自身の哀感の涙が露によって表現されている。天皇にしてみればあとの天皇の後継者は重要課題である。天皇は長子の大友皇子（第三十九代弘文天皇）に皇位をつがせたい意向もあつたであろうが、当時の皇位継承のパターンから大海人皇子（第四十代天武天皇）と想定されている。天智天皇崩御後、この両者の争いが壬申の乱となって現れたのである。このことを天智天皇は在位のころ予感をしておられたのでこの哀感の歌となつたのである。万葉集以来現在まで詩歌を貫いているのは哀愁の心であり孤愁の心である。またこの歌は思いをとげられない女性に対する恋の涙とも受けとられる。「露にぬれつつ」は露にぬれながらとい

う状態で「待っている」などの動詞が省略されている。露にぬれながら、涙しながら女性を待っていることの意味を持つ。定家は露を女性に対する涙として受けとめたのであろう。

天智天皇は中大兄皇子にして、建元元年（六四五）藤原鎌足と謀り、蘇我入鹿を暗殺、年号を大化と改め大化の改新を実行し、公地公民の制を確立して地方豪族の力を押え中央集権の実をあげたのである。しかし天智二年（六六三）に朝鮮白村江の戦いに敗れ、百済の亡命者を招き軍事に文化に役立たせ、都を近江の大津に移した。天智七年（六六八）即位して天皇となり、額田女王は天皇の后となった。だが后は大海人皇子（天武天

皇）との間に十市皇女を生み、万葉集に二人のつぎの相聞歌がある。天皇は天智十年（六七一）四十六歳で崩じ、翌年壬申の乱となった。

——万葉集より——

天智七年（六六八）行幸

あかねさす紫野行き標野行き

野守は見ずや君が袖振る

（額田女王）

紫のにはへる妹を憎くあらば

人妻ゆゑに我恋ひめやも

（大海人皇子）

額田女王は「貴方が私に手を振っているのを番人が見ているではありませんか」と歌を詠み、大海人皇子は「美しい君を憎いと思うならば、人妻であるから

私は恋しない」と歌にて答えたという。

②春すぎて夏来にけらし白妙の

衣もほすてふ天の香具山

持統天皇

持統天皇は天智天皇の第二皇女にして第四十代天武天皇（大海人皇子）の皇后であつたが、天武天皇亡きあと第四十一代持統天皇となられての歌である。春が過ぎて初夏が来たようである。新緑に萌えた天の香具山のほとりに真白な布が干してある。初夏の新緑と白布の清々しさが相い奏し、これを女帝が眺めている光

景がすばらしく表現されている。万葉集にも掲載されているが、万葉集より若干流麗化されている。また天の香具山と名詞止めにした点が固有名詞として生き一層すばらしい。百人一首の中で名詞止めの歌は少なく十二首ほどである。

持統天皇は十三歳で父君の弟である大海人皇子（天武天皇）と結婚し、壬申の乱後は皇后となられた。天武天皇が早く崩ぜられたので、即位し律令国家の制定に力を尽し、持統八年（六九四）大和に遷都された。女帝は歌人にして、当時万葉歌人の黄金時代であつて、その代表柿本人麿はよくお伴をした。女帝は旅を好み、吉野、紀伊方面へたびたび旅をされた。

奈良へ旅をされた方々は美しい大和やまと三山さんざんを眺めて昔を偲おもはれたことであろう。この三山はきり立った山でなく、なだらかな稜線うねびがまことに美しい。大和三山とは、畛傍山うねびやま（一九九m）耳成山みみなりやま（一四〇m）天香具山あまのかぐやま（一五二m）であつて、標高は高くないが、大和平野の中であるので、きわだつてよく眺められるのである。三山には伝説がある。男山おとこやまである香具山かぐやまが女山おんなやまである畛傍山をいとしく思い、男山である耳成山と争つたという。この伝説をもとにして万葉集につぎの天智天皇の三山の歌がある。現実さんざんに天智天皇、額田女王、大海人皇子（天武天皇）との關係を三山の伝説に託されたものであろうか。

—— 万葉集より ——

天智天皇長歌

香具山かぐやまは畛傍うねびををしと耳梨みみなしと

相争あひあらそひき神代かみよよりかくにあるらし

古いにしへも然しかにあれこそうつせみも

妻を争ふらしき —— 略 ——

三山のうちで香具山だけが「天の」とあるのは天から降つた山であるという伝説によるものである。畛傍山と耳成山は火山にして、大地からマグマが噴き出たもの、香具山は天からの風雨による浸しん蝕しょく作用によつて出来た山であることには、この伝説のゆかりはないようである。

（つづく）

◎『浄土』表紙版画絵販売についての一案内

『浄土』七月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒103 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京)八一八二一八七

季語やぶにらみ (五)

壬申の乱 (2)

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

額田王という女性については不明な点が多い。年齢も不詳なら、その出自も明らかでないのである。従って、古来いろいろ取り沙汰されているが、的を射たものは一つもないと言っても過言ではないだろう。分かっている

のは、皇極天皇の侍女で、巫女であったこと。そして、孝徳・斉明・天智と三代の天皇に巫女として仕え、その間に大海人皇子と結ばれて十市皇女を生^なしたが、その妃とはならず、後に中大兄皇子の寵を得たがその妃にもなら

なかつたこと。万葉集前期を彩る女流歌人の最たる人であつたというぐらいのことである。

出自にしても、国栖くにすと呼ばれた吉野に程近い山里の、額田姓を持つ豪族の娘であつたと考えるのが一番妥当な線かもしれない。しかし、豪族とはいっても、山中の盆地の幾つかを統べる程度だつたと思われるから、たかが知れている。山里の女は口べらしのため、幼くして都へ働きに出された。一生下働きで終わる者もいれば、貴族や豪族の子を産み、それなりに落ち着く女もいた。中大兄皇子の長子（大友皇子）を産んだ、伊賀采女宅子娘がそれである。

一三、四歳だつた額田王を都に召し出したのは、当時まだ舒明天皇の後だつた皇極天皇

である。鄙にも稀な麗質は、夙に都に聞こえていたのであつた。皇后に仕えて間もなく、額田は巫女としての能力を発揮するが、そのきつかけは他愛ない失せ物探しであつた。皇后の侍女の一人の沓がなくなり、大騒ぎしてゐるのを聞き咎めて、犬の巢を探せと教えてやつたのである。何でも噛みたがる、乳歯から永久歯に生え替わる頃の子犬の習性を知つていれば、容易に察しがつくことであつたが、額田が聡明だつたのは、「貴女の沓は多分見つかる」と存じます。但し、原型はとどめていないでしょう。でも、犬を叱つたり打擲してはなりません。すべては神の思し召しなので「すから」と、意地悪な年上の侍女に釘を挿し、犬の命を救うのを忘れなかつたことである。被女が言つた通りの形で沓が現れたので、一

遍に額田王は神の声を聞くことができるらしいという評判が立った。それについて額田は肯定も否定もしなかったが、同じようなことが度重なると、皇后は神に仕える巫女の役を彼女に課した。

年弱な額田は破格な館を与えられ、その一室に設けた祭壇の前で過ごすことが多くなつたが、額田自身は自分に巫女の資質があるとは思っていない。ただ、人より多少五感がすぐれているかなとは感じていたが、それも都の人と比べてのことで、山の暮らしをして来た者としては、別に珍しいことではなかったのである。

（都とは不思議なところだこと）

神事を営む振りをしながら、額田はその頃習い覚えた歌作りに熱中していた。頭の中で

推敲を重ねているうちに、ふと口をついて出た歌の断片が、神託を願う人々にはそれがあたたかも神の声と聞こえるか、その意味を勝手に解釈して一喜一憂するのが、額田にはおかしく映った。自分で裁量できる範囲内のことは神託として人々に伝えたが、朝廷内の人事や領地争いなど、安易に判断してはならない問題については、「神の声が聞こえませぬ」と言つて、額田は口をつぐんだ。巫女になつてから美貌に一段と神秘さが加わつた額田に、愁わしげにそう告げられると、人々はそれだけで納得し、逆に己の非を詫びて退散するのであった。額田の許にはそういう人々ばかりではなく、歌の添削や代作を頼む者も多く出入りして、世間話の形で様々な情報を残して行つたから、あらゆる角度から情報は額

田の所に集まつた。特に下々の噂話の中には、思いがけない真実が潜んでいたりするので、額田は寄せられた情報は大切にした。そして、それを整理・分析して、神託に役立てたのは言うまでもない。

為政者が事を起こす時、「我が意思に非ず、神の啓示なるぞ！」というのが、国民に示す最も安易な方法であつた。だから、歴代の天皇や中大兄皇子も、常に額田を身近に置いたのである。但し、彼等が神託に全幅の信頼を寄せていたかどうかは別問題である。が、少なくとも反対意見をつぶす切り札になつたのは確かである。額田がもたらす神託を、彼女の創作であると看破していたのは鎌足であつた。しかし、創作と知りつつ神託を一番政治に生かしたのも鎌足であつた。鎌足は時々思

ひ出したように額田を訪ねて来て、とりとめのない話をして帰つたが、その中に神託に及ぼす重大な示唆や鎌足の願望が隠されているのを額田は知っていた。だから、鎌足が正しいと思えば、朝廷の百官を、いや中大兄皇子さえも向こうに回して孤軍奮闘している鎌足に、有利な神託を下すのに躊躇することはなかつた。

鎌足が病床についたのを聞いて額田が見舞つたのは、六六九年の秋口であつた。鎌足の、とても五〇代半ばとは思えぬ程急に老いさらばえた顔を見て、額田は不吉なものを覚えた。

人払いをすると、鎌足は声をひそめて、「これから申し上げることは、鎌足の遺言としてお心に留め置いて頂きたい」

と言った。

「我等が入鹿を倒して目指した当初の政治を歪曲されて、このところ天皇は益々専制の度合いを深めていらつしやる。鎌足亡き後は一層その傾向に拍車がかかるでしょう。朝廷の職制にも大きな変化があるものと思われます。その時微妙な立場に立たされるのが大海人皇子様。新たに要職に就いた者は、皇子の発言力を封じ、果ては「謀反」の汚名を着せて、お命を縮めにかかるかも知れませぬ。皇子をお救いできるのは、額田様、貴女様しかございませぬ」

「どのような手立てで……」

「まず、吉野へ逃れ、伊賀・伊勢と経て美濃へとだけ仰有って頂ければ……。あの辺りの国司は総て以前皇子の恩顧を蒙った者ばかり

ですから」

深謀遠慮というか、言われてみれば大和の旧都を取り囲むように、半円状に大海人の息のかかった国司が配されていた。

「鎌足様は、その日が来ることを予見なさつてこのような」

「いやいや、この道筋は私めにもしものことがあればと、かねて設けておいたものです。しかし私にはもう不用のもの、改めて皇子に進呈致そうと思ひましてな」

そう言うのと、鎌足はこの日初めて額田に笑みを見せた。

「考えてみますと、額田様を介してもたらされた神託を頼りに、我々は政治を動かして参りました。はつきり申せば、利用させて頂いた。しかし、よく考えてみますと、我々は額

田様の掌の上で踊っていたようなもの」

「鎌足様！」

「もう少し言わせて下され。貴女は常に時の流れを読みながら、時宜を得た神託を下されたから、大過なく我々はやって来られました。もし、貴女がその気になれば、天下を覆すことなど簡単なことだったに違いないのです。

そんな綱渡りのような毎日でしたから、神託は何よりの味方でした。さぞかしお疲れだったでしょう。天皇はこれから最も額田様の神託が必要なのに、そうは考えておられませぬ。それどころか邪魔だと思われる節がうかがえます。いつの頃からか、天皇はご自身が神であると信じこまれてしまわれたのです」

「鎌足様！」

いくら鎌足でも、言っていることと悪いことがあると、額田は思った。

「もう神の声を聞くのはおやめなされ」

「お言葉に従いたく存じます。私も常々そう願っておりますので……。最後に一つだけお尋ねしてもよろしゅうございますか」

「……」

「職制の改革と申しますと……」

額田は聞くだけは聞いておこうと思った。

「大友皇子様の重用。補佐には蘇我赤兄が」

「赤兄様を筑紫からお呼び戻しになるのですか？」

「恐らく。太宰帥に任じて遠ざけておきました。が、盛んに返り咲きを画策しております。それに、天皇には有馬の皇子様のことで赤兄には借りがございますから」

それだけ聞けば充分であった。

「一番難しいのは、大海人皇子が吉野へ落ちられるきっかけです」

「大海人皇子と大友皇子の間に、後日争い事が起こると鎌足様はお考えなのですね？」

「いや、大海人様と大友様の取り巻きの間に、と申し上げておきましょう」

そう言うのと、鎌足は目を閉じて二度と額田の顔を見ようとはしなかった。

「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな——」

鎌足は、六六一年西征の軍が伊予の熟田津を發つ時、齊明天皇に代わって額田が詠んだ出陣の歌を口ずさんだ。

「あの頃は若うございましたな、貴女も私も、皇子様方もみんな……」

わずか八年前の出来事を懐かしむ鎌足の心情を思うと、額田は急に居ても立ってもいられなくなつて立ち上がった。

「事ある毎に、私はこの人に乞われて神に祈つてきた。そして、人の何倍もの重圧に耐えて生き抜いて来たその人は、ボロボロになつた体を横たえて、人生の港に錨を下ろそうとしている。」

鎌足の目尻に溜まつた涙がこぼれ落ちるのを見届けてから、額田は静かに病室を立ち去つた。

鎌足の死が報じられたのは、それから間もなくのことであつた。享年五五。晩年は必ずしも天智天皇との仲はうまく行つていなかったと、史書は伝えている。

(続く)

◇ ◇ ◇ 新購読会員のご紹介を ◇ ◇ ◇

月刊紙『浄土』の刊行、なんとか続けているという現状です。編集にも遺漏が多く、また校正のミスも相変らずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることはありません。失敗や不手際の多いことながら一歩一歩の歩みを今後も少しずつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上なにかをお願いもできにくいことではありますが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げる次第です。一ページ、ポツカリあいた埋め草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字詰用紙六―十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十八巻 七月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年六月二十五日 印刷

平成四年七月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 (南)小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三六二)五九四四

〒一〇三(振替)東京八―八二―八七

◇◇◇好評の新刊◇◇◇

教訓仏教語辞典

栗田順一編 価格一六〇〇円

○仏の教えはいつも新しい！

日常用語として使っている仏教語も、その意味をよく理解してみると、私たちの暮らしに密着した教えが多い。本書はなじみ深い仏教語の意味を生活に密着したかたちでわかりやすく説いている。

〈出版・発行〉

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三十七 電話(〇三)三三三三三三三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三三三三六―三三三五一まで。

第五十八巻

七月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
平成四年六月二十五日印刷 平成四年七月一日発行